

入賞

僕の手のひら

岩出中学校 3年 櫻井 湊音

「あっ」

「ガチャン」

一瞬の出来事だった。

2年生の終わり頃「行ってらっしゃい。気をつけて。曲がり角は止まって。」と、毎朝の決まった母のセリフ。僕は「はい。」と返事をしながら、いつものように聞き流していた。その日も急いでいたわけでもなく、深く注意をしていたわけでもなく、いつもの時間、いつもの通り慣れた道を自転車で爽快に走り、学校へ向かっていた。学校の近くの住宅街のＴ字路で左折しようとする、カーブミラーに緑色の車が見えた。そんな事珍しい事ではないし、僕はいつもの様に左に寄り、左折しようとした時、カーブミラーに映っていた緑色の車は右折し、僕のすぐ目の前だった。間一髪の所で僕は力いっぱいハンドルをきり、左にこけた。車の運転手は窓を開けて「大丈夫？」と聞く。僕は小さい声で「はい。」とだけ答えると、その車は走り去った。僕は頭が真っ白だった。心臓が耳のすぐ後ろに付いているんじゃないかと思うぐらいドキドキの音がとても大きく聞こえた。ドキドキの音が少し治まると、僕は手のひらから血が出ている事に気付く。転んで地面に手をついた時だ。お気に入りの自転車にも少し傷が付いているし、最悪な日。僕は次第にあの車の運転手に腹を立てた。

学校に着き、先生や友人に心配された。家に帰ると、家族からも心配された。そして、「これぐらいの怪我で済んでよかった。」とみんな口を揃えて言ってくれた。

僕は腹を立てるだけで大切な事にその時やっと気付いた。少しでも衝突していたらこんな事では済まなかった。いつもと一緒に、慣れた道というだけで勝手な安心感を得ていたのだ。あの時僕は、「いつも大丈夫だから。」や「こっちへは来ないだろう。」「車が止まってくれるだろう。」とどこか頭の片隅に軽く思っていたのだと思う。もしかしたらあの車の運転手も同じ事を思っていたのかも知れない。あの時、「こっちへ向かって来るかもしれない。」や、「危ないかも

しれない、止まっておこう。」と思って行動していたらこんな事にはなっていなかったかもしれない。母の毎朝のセリフを聞き流していた証拠だと、後悔した。

その日の夜、母は僕にこんな事を話した。「いってきます。」は、「行きますが必ず帰って来ます。」という言葉省略したもの。また送り出す側の「行ってらっしゃい。」は、「無事に行って帰ってらっしゃい。」と祈りが込められている言葉。再会を願う言葉だと。何気なく使われているがとてもいい言葉だと思ったのと同時に、僕は必ず無事に帰らなければいけないと心に決めた。事故のニュースはテレビで見たり聞いたりする。でも僕は今回の事があるまで他人事だったのだ。正直、自転車の事故はお年寄りか自転車に乗り始めた子供だと勝手にイメージしていた。今回僕は交通事故とは、一瞬で大怪我をしたり命を落としてしまう事、そんな事になればとても悲しい思いをする人がたくさんいるという事に改めて気付いた。どんなに注意していても防げない事故もあるだろう。しかし、防げる事故もあると思う。交通ルールを守るのは勿論の事、一人一人が「かもしれない。」の気持ちを常に持つ事が大切だ。そして、いつもより少し早く出発し、交差点は立ち止まる。面倒くさいが、時間に余裕があれば譲り合うという気持ちの余裕が生まれる。みんなが優しい気持ちで行動すれば事故はきっと減るだろう。

僕の手のひらには、あの時の怪我の痕がまだ薄く残っている。僕はあの日の気持ちを忘れないよう、今日も家族に「いってきます。」と言い、手のひらを見つめ、自転車に乗る。